

打ち上げだ！

2009

8月8日

ここは愉快なダンの国
毎日いつでもお祭り騒ぎ
今日の昼には昼を祝って
今夜は月見て夜祝う

国の外れの屋敷には
仲間外れな時の魔女
この魔女だけはこの国で
楽しい思いをしていない

皆に無視され時の魔女
魔法で夜を奪いさる
魔女の屋敷は暮れ泥み
綺麗な夜空を独り占め

夜を奪われ国民は
怒りに震える訳でなく
終わること無き長き昼
祝って祭って踊りだす

ところがどっこい国民も
明るい空じゃ眠れない
寝不足さすがに辛くなり
夜を祈って踊りだす

夜を楽しむ時の魔女
夜空もだんだん飽きてきた
太陽恋しくなった魔女
今度は昼を奪いさる

昼も奪われダンの国
朝日と夕日が支配する
踊り疲れた国民は
曇りの時に床につく

魔女の屋敷は大騒ぎ
昼と夜とが大喧嘩
眠れぬ魔女は昼と夜
檻に閉じ込め床につく

眠りについた時の魔女
時を忘れてただ眠る
餌を貰えぬ昼と夜
力を失い消え去った

皆の寝息を聞いていた
夕日もだんだん眠くなる
ついに夕日は大あくび
朝日はそれ見て注意する

夕日はすっかり寝てしまい
体の一部が夜になる
怒った朝日は熱くなり
体の一部が昼になる

ふと目を覚ました国民は
空が戻ってお祭り騒ぎ
今日の昼には昼を祝って
今夜は月見て夜祝う

月陽炎

「今日もよい月だ。」

空に浮かぶ、雲に隠れて朧おぼろげに見えている月を仰ぐように眺めて、男は手に持つ杯をわずかに傾け、中身を口の中へ流し込んだ。

飲んだものが己の身体中を巡るのが感じられるような、そんな気がした。心地良い浮遊感に包まれながら、顔を正面へ向けた。焦点の定まらない視線の先には彼女が居る。もう俺の前に現れるはずのない彼女が。

「どうしたんだい？」

ひどく穏やかな声が出た。

男の瞳に浮かぶのは驚きと愛しさと、あと悲しみ。

彼女は何も口にせず、ただ佇んでいた。

そして男も何も口にせず、動かずにいた。

ふと彼女から視線を外し、再び月を見た。

月は地球に寄り添っているように思う。

付かず、離れず、距離を適度に保ちつつ、

満月、新月、その姿を日々変えながら、

確かに地球の傍らには月が居る。

男の手から杯が滑り落ちた。

持つ物を失った手は男の顔を覆い、

落下した杯が床にぶつかり、砕ける音がした後には嗚咽が響いた。

瞳からは止めどなく涙が流れ、

涙で滲んだ視界には、なおも微笑む彼女の姿がはっきりと見える。

男は明日という日が来ることを恨みながら、一度だけ大きく吼ほえた

或る夜の事だ。残業を終え、終電に乗り帰宅する私の足取りは、想像するに易く重たいものだった。後少しで自宅。そんな気の緩みを睡魔は見過ごさなかったようで、気付くと、私は降りるべき駅を通り過ぎていた。

見知らぬ駅に独り。飲み屋で時間を潰す位は出来るだろう。そう思い降りた駅には何も無く、此の儘では野宿なのか……そう諦め掛けた其の時、不図小さな看板が目飛び込んだ。

BAR『ONE NIGHT STAND』

弱々しい原色のネオン。場末の寂れた雰囲気。然れど、そのネオンに誘われるように、私は其の店へと入って行った。

：カラン♪　：カラン♪

扉に据え付けられた小さな青銅の鐘が錆付いた挨拶を鳴らす。其れは如何にも精一杯と云う具合で、店内に掛かるクラシックジャズと相俟って、より一層の安っぽさを強調していた。店内を見渡しても、カウンタでグラスを拭くマスタと思しき男以外、従業員は愚か客一人いない。矢張り、所詮は場末だろう。

此方に気付いた男は無言で手をカウンタ席の方へ遣る。此方へ、と言う事なのだろう。私は彼の言う(?)通りに席に着いた。

—ようこそ、御注文は何に為さいますか？

—マスタの御任せで良いよ

—畏まりました：何か苦手な物は？

—いえ：特には

—では、当店オリジナルの混成酒(カクテル)をそう云って、彼は混成酒を作り出す。

改めて彼を見ると、実に特徴の無い出で立ちであった。百人が彼を見れば、九十人がバーのマスタと答え、残りの十人は執事と答える容姿、声、仕種、気品。其れは或いは、十二分に特徴的だと思われるのではあるが、其れでいて顔を背けると即座にその顔を思い出せ無くなる、そう云う意味で特徴の無い出で立ちであった。

暫くして、私の前に一杯の混成酒が置かれる。想起(レミニセンス)で御座います。今の貴方に恐らく最適かと……

其れは琥珀色、否、墨色(セピア)をしていた。

それを一口煽る。重い芳香が喉を抜け、熱さが込み上げる。自慢じゃ無いが私は酒に滅法弱い。こんなきつい酒を飲んで大丈夫かと心配になったが、其の裡に大層気分が良くなってきた。気分が良くなって、其れが限界まで来て、不意に涙が流れた。久しく泣いた事など無かった。想起：其の名の通りに想い、起こす。自らの半生を。一度堰を切った感情は留まらず、兎にも角にもマスタに話し相手になって貰った。上司への不満。失恋譚。普段心の奥に仕舞っていた諸々が口を衝いて出た。

粗方話し尽くした後、私は不意に彼の話を聞いてみたくなった。彼の為人に興味を持った、と云うより自分一人が話すのに気が曳けたと云うのだろうか。

—マスタ、何か話してくれないか

—そうですね：其れでは僭越ながら、私(わたくし)が未だ此の店を出す前の頃の話でも……

そう云って、彼は或る話をした。其れは他愛も無く、今となっては欠片も思い出せ無い話であった。唯、其れが心地良い時間であった事だけは心に残っていた。

気付くと何時の間にか朝であった。少し寝ていたらしい。マスタはずっと起きていたようだ。精算をしようとするとマスタに遮られた。

—御代ならもう既に頂いて居りますので

酒代を払った覚えは無かった。然し、酔って記憶の無い裡に払ったのだろう、と思いい気にはしなかった。マスタに礼を云い、私は帰宅した。今日は休日だ。少し気分が良かった。

暫く経った後、不図あの店にもう一度行きたくなくなった。然し此処に来て、私はあの夜降りた駅の名すら思い出せない事に気が付いた。

仕事帰りに態と電車を乗り過ごしてもみたが、矢張り降りたと思しき駅は見つからなかった。其の裡にあの夜の事は夢だったのでは無いかとも思った。唯一つ思い出した事があった。店の名前の由来だ。one night stand……英語で一夜限りの演奏、若しくは情事。

夢だったのだろうか。其れとも、あの店は今宵も誰かの一夜の御供をしているのだろうか。

熱帯夜に寝たいや

暑い　とにかく暑い　こうも暑いと勉強なんか
手に付かへんし　元はと言えばクーラーが故障
中のせいやのに　：一体どないなつとん？　直
す金も無いのに　喧嘩売つてんの？　扇風機も
何ややる気無いユルユルした風を送るだけやし
手で扇いだら余計え暑いし　喉乾いた思うても
水道の水まで温いし　もお　ホンマ勘弁してえ
や　氷は作った尻から無くなつていくし　嗚呼
また製氷機に水入れな　おまけに蚊あまで飛ん
どるし　お前らはええよな　そおやつて気まま
にプンプン飛んで血い吸うてるだけやもん　嗚
呼　もお五月蠅い　静かにして　：つてまた噛
まれてるし　もお何でそないに搔きにくいとこ
ばつか噛むん？　嫌がらせ？　ウチ何か悪いこ
とでもした？　ペチン！　うわっコイツめっち
や血い吸ってるやん　ティツシュ　ティツシュ
：コン！　バシヤツ！　：つて　うわっ！　ちょ
っ！　もう最悪　コップ倒してもうたやん（泣）

ケ・・・暑い。

学校での合宿。クーラーが壊れた灼熱地獄。扇風機などたいした戦力にはならない。それでも人は根性出せば眠ることが出来るものである。そうして深い眠りに、いや不快眠りに落ちていた俺は急に現実を引き戻された。

「あのさ、佐藤。全然眠れないんだけど。」

眠れない夜は

知るか。明日も練習あるんだから、さっさと寝ろ。

「だつてさー、寝苦しいじゃん。眠気なんてないよ、実際。」

じゃ、羊でも数えてれば？

「ええ。なんで暑苦しい夜に暑苦しい動物数えながら寝るのさ。」

じゃあ執事にしろ！ 語感が似てるから多分いけるはず！

「そーゆー問題かな・・・。」

ぶちぶち文句を言いながら布団に戻っていった。俺は眠ってたんだつて！

「さー。おいさー。」

あれから数十分。ここに再び起こされている俺がいる。

「やつぱ無理だ。数百人同じ顔が並んでいると気持ち悪い。つか飽きる。」

・・・好きな芸能人とかは？ 少なくとも飽きないだろう。

「オーケー！ じゃあ竹内力で！」

・・・渋っ！

「さーとお。ねーってばー」

そろそろキレてもいいですか？

「数十人の竹内力が数十人の哀川翔と抗争を始めたんだけど・・・。」

高島礼子を呼べ！

「んー、俺は岩下志麻派だからなあ。」

・・・古っ！

「つーかさあ、逆に寝れないんだけど。なんか寝首をかれそうぞ。」

「誰か『極道の妻』の話をしなかったか！」

先生登場。

「ん、まだ起きていたのか。極道もので盛り上がるのもいいが、ほどほどにしてさっさと寝ろ。」

そうそう、俺も岩下志麻派だ。」

どこから聞いてたんですか。

状況説明中・・・。

「・・・なるほど。ならば俺の撮った『校長先生 a t 卒業式』のDVD見せてやろう。」

いや、なんでそんなものが・・・。

「この卒業式は、校長が三時間の式典中、近來稀にみるダダズベリを十八回も披露した伝説の卒業式だ。あまりにも無残なので焼き増して先生達に配った名残だ。安心しろ。話自体はどうしようもなくつまらない。」

せつかなので宿直室についていった。

「おお、あった。これだ。」

・・・あの、これ『極 d』「まあ、せつかく見つけたんだから。」

いや、明日の練「おお！ 全シリーズ揃っているじゃないですか！」「当然だろー！」

やたら二人で盛り上がっている。俺はクーラーの効いた宿直室の片隅でゆっくり眠りに落ちた。

旅をしている少年レイと少女ルナ。二人は次の街を目指し、山を越えようとしたが、道に迷い、日が沈み、方角さえも分からなくなってしまった。そんなときに、幽霊が現れた。

「じゃじゃ〜ん」

「なっ、なんだ!？」

「おどろいた？」

「驚いたわよ。」

「おまえは一体、何者だ？」

「あたいはユウ。ユーレイだよ」

「幽霊!？」

「そう。ここで会ったきねんに、あたいとあそぼう」

「悪いが今はあそんでいるところではないんだ」

「そういえば、お兄さんたち道にまよっているんでしょ」

「(なんで知っているんだ?) まあ、そうだ」

「あたいに勝ったら、道をあんないしてあげるよ」

「どうする？」

「私たちが勝てば道を案内してくれるから、遊んであげたら？」

「分かった。ユウ、お前と遊ぶよ」

「オッケー」

「で、何して遊ぶんだ？」

「おにごっこ。あたいがにげるから、おいかけてきてね〜」

と言うとユウはすぐに逃げた。

「え!？ 鬼は？」

「私たちよ!」

「そうか! まてー!」

レイたちはユウを追いかけて行つたが、ユウの逃げ足も速く、捕まえることができない。

ユウを追いかけっていると、気がつくとも山から下りていた。辺りには誰もいない。どこからかユウの声が聞こえる。

「タイムアップ! お兄さんたちの負けだよ。けど、楽しかったからまたあそぼうね。ばいばい」

「制限時間があつたのか…」

「けど、山から下りれたじゃない」

「そうだな」

もう、夜が明けそうになっていた。

夜はあたしたちの時間だ。

草むらに寝転んで、手をそとにかさす。丸い月がぼつかりと空に浮かび、あたしの手をぼんやりと鈍く照らす。

「だいぶ……透けてきた」

そうつぶやいたとき、がさりと茂みが音をたてた。あたしは身を起すと、林の方へと声をかけた。

「ゆういちー。こつちだよ」

がさがさという音はいつたんだと透切れると、こちらへと近づいてきた。

「こんなところにいたんだ」

ゆういちはその言つて、あたしの横にすんと腰をおろして、月を見上げた。あたしはゆういちの横顔をそつと見つめる。林を吹き抜ける風が、彼の髪を静かに揺らす。月明かりが彼の顔に陰影をささむ。きれいだ。

「……ねえ、まだあれ持つてるの？」

あたしが夜の静寂を破らないようにそつと問いかけると、ゆういちは、ああ、と言つて、ポケットからそれを取り出した。キチキチと音を立てて、刃を出す。月明かりを鈍く反射して光るそれは、おととい彼が初めてあたしの前に姿を見せたとき、持っていたものだ。

「冷たいのかな」

そう言つて、刃の部分に触ると、彼が深くうなずいた。

「冷たいよ」

「ささつたら痛いよね」

「痛いだろうね」

「死んじやうかな」

「うん、たぶん」

「そしたら、あたしたちの仲間入りだね」

「でも、死ぬ前のことは忘れちゃうんだろ？」

ゆういちにじつと目を見つめられて、あたしはこっくりとうなずいた。

「じゃあ、まだ死なない」

「なんで？」

あたしが聞くと、彼はふつとほほ笑んだ。

「だって、せつかく仲間入りしたつて、君のこと分かんなくなっちゃうじゃないか」

あたしは彼のセリフに答えられずに、月を見上げた。暑さも冷たさもう感じない。気が付いたらここにいた。ただ、それだけ。

「……だいぶ、透けてきたね」

ゆういちの声にあたしは月を見上げたままうなずいた。

「そろそろ、消えちゃうかな」

視線を月から地面に向ける。そこにあるはずのあたしの足は膝から下がもつない。全身がじわりじわりと透けて、消えていく。初め何人かいたあたしの仲間たちは、同じように消えていった。「そしたら、これ使うよ」

ゆういちは手の中のものをもてあそびながら言った。

「それでさ、生まれ変わったらまた会おう、ね」

あたしは返事をしなかった。できなかった。うなずくことも生きたこともしない。

あたしたちが見えるという人間などいるとは思わなかった。たいていの人間はあたしたちが何をしたいようと、気付かずに前を通り過ぎて行く。「自殺の名所」そう呼ばれるこの土地で彼らは深くうつむいたまま、林の奥へと歩いて行くのだ。ゆういちもそんな一人だと思っていた。だから、なんの気なしに彼の前を通り過ぎた。それが彼の自殺を妨げることになるとは知らずに……。

地面に付いた手から草が透けて見えた。さつきよりもだいぶ消えてきている。

「この三日間君と話せて楽しかったよ」

彼がぼつりと口にした。お別れの合図だと思った。あたしの、そして彼の。そのときだった。

がさりと大きな音がして、続いて小さなうめき声のようなものがもれた。反射的にあたしもゆういちも立ち上がっていた。木の間を走り、声のした方へと向かう。

木々の合間から、躍り出ると、煌々と冴えわたる月明かりの下、一本の太木からロープがつるされていた。そして、そこに男が……。

あたしは動けなくなった。フラッシュバックのように映像があふれ、その重みに耐えられなかった。そう、あたしはこの森で死んだのだ。あんなふう……。くらりと揺れた視界の中、ゆういちが男に駆け寄るのが見えた。

手に持ったものでロープを切断する。崩れ落ちる男。胸が激しく上下するのが見える。

ああ、助かったのだ、彼が助けたのだ……。そう、彼が……。

よかった、と思つた。心の底から、よかったと思つた。今まで林の中に入る人をたくさん見たのに。ただ、見ていただけなのに。初めて安堵した。人が生きるといふことを知った。そして、ゆういちが命の大切さを知っているということも。彼は死ぬべきでない。消えつつあるはずの感情、それが脈打つ気がした。

男の息を確認したゆういちがほつとしたようにこちらを見る。

あたしは手を伸ばす。しかし、その手はもうすでに視界に入らない。体のほとんどが消えている。下を向けば、もう自分の体が見えなかった。ゆういちが驚いたように駆け寄ってくる。

「死んじやダメだよ！」

あたしは叫ぶ。

「死んじやダメ！」

消えていくのが分かる。視界がぼやけ、思考が追いつかない。

彼の手がそつとほほに触れた。

「生まれ変わったら会いに行くから」

あたしは彼に向かってほほ笑んだ。辺りが白くかすみ、消えかける中、あたしは次こそはしっかりと生き抜こうと強く心に決めて、ゆつくりと、ゆつくりと目を閉じた。

小町の詠みし歌のごとく

思ひつつ寝れども

見えしは背ばかりなりけり

うつつにも 夢にも

わが袖は乾く間もなし

小野小町がかつて詠んだ歌のように、あなたを思いながら寝れば夢で逢えるかと思ったのだけれど、見えたのはあなたの背中ばかりでした。現実はもちろん、夢でさえ、私の着物の袖は涙で濡れて、乾くことはありません。

ぬばたまの

夢と消えしか

君寄る夜

恋と知りせば

逢はざらましを

あなたが私のところを訪れていた夜は、もう夢となって消えてしまったのでしょうか。私は今でも夜よ来いと願ってしまいます。この辛さが恋というものだを知っていたならば、あなたに逢うことなんてしなかったのに。

頭脳明晰、容姿端麗。ずっと私の自慢であった兄はいま、いわゆる《夜のお仕事》をしている。

街全体が氷漬けになりそんな冬のある日、東京の下宿から帰省した兄は、赤いフレアスカートを履いていた。母親譲りの色素の薄い髪の毛は、ちょうど肩のところで揃えられ、軽くウェーブがかけてあった。父は怒鳴り、母は泣き、我が家には兄など存在しないことになった。

荷物をまとめて玄関を出ていこうとする兄を呼びとめ、仕送りも無しにこれからどうするのと私が訊くと、兄は桃色の名刺を取り出し私に渡した。そこにはパピヨンという店の情報と、ひどく頭の悪そうな女性の名前が載せられていた。それが僕の源氏名なんだと、照れ笑いを浮かべながら兄は言った。それは悲しいくらいに綺麗で、透き通った笑顔だった。

兄が家を追放されてから一カ月後、家出をした私は、兄の下宿である東京のアパートにいた。

「そろそろ家に帰る気はないの？」

朱色に蝕まれた太陽が西の果てに沈むころ、仕事のために化粧をしながら兄が言った。私はわざと聞こえないふりをして、兄の布団にそっと顔を押し付ける。香水の匂いが鼻孔をくすぐる。男の人の布団には似つかわしくない、甘い香り。

「気持ち悪い」不意に言葉が口をついた。「本当にお兄ちゃん、そんな恰好で働いてるんだ」

僅かに顔を持ち上げて、兄を見る。すると化粧台の鏡を介して視線がぶつかる。

「やっぱり嫌かな？　こんな兄さんは」僅かな沈黙を挟んで、兄は言った。

やめて欲しい。そんなに悲しげな顔で笑うのは、お願いだからやめて欲しい。

「私が嫌って言ったって、そんな関係ないくせに」

兄の辛そうな表情を見るのが苦痛で、私は下向きに目を逸らす。窒息しそうなほど重苦しい沈黙が、部屋全体に立ち込めていく。私はそれに耐えられなくて、せめて弾んだ声で言う。

「ところでお兄ちゃん。今夜はいつ帰ってくるの？」

「そうだね、たぶん朝の六時くらいには戻れると思うよ」

「朝ごはん、用意しておこうか？」

「いや、そんなに気を遣わなくていいよ。それよりさつきから言ってるけれど——」

「帰らないよ、あんな家」兄を追放してしまったあんな家、「もう絶対に帰らない」

俯いた頭の上に、ふと暖かな感触が灯る。いつの間にか化粧を終えた兄の、そのてのひらの感触だった。懐かしさが胸を満たす。私が泣きそうになるといつも、兄はこうして頭をなでてくれた。

「お兄ちゃん。お兄ちゃんはやっぱり、男の人が好きなの？」

「そうだって言ったら、軽蔑する？」

その言葉を聞いた瞬間、悲しいのか、悔しいのか、妬ましいのか、なにもわからなくなってしまった。私は自分の膝に顔をうずめる。もちろん軽蔑なんてしないと、そういうべきなのに。そうでなければ、私はあの母や父と同じになってしまうのに。兄に嫌われてしまうのに。

「早く行きなよ。遅れちゃうよ、仕事」

とうとう夕陽が沈みきり、夜に侵された部屋のなかで、下を向いたまま私は言った。涙声になるのを必死でこらえながら、けれどただそれだけを、私は言った。

憧れの終り

僕の相棒、ローリーはあの日、星になった

ローリーと僕は、この町一番のタッグだった。

ローリーと公園で作った砂の城は、

未だに伝説として語り継がれているほどであるし、

ローリーとだったら、

町一番のかみなりじいさんを出し抜くことも、

薄暗い雑木林を隅々まで探検することだって、簡単だった。

その日はいつも以上に蒸し暑い日で、

あぶらぜみがうるさくてイライラして、

別にそのせいではないと思うけど、

僕は飲んでいた麦茶を畳にこぼしてしまった。

それが、君の地上最後の日。

ローリー、君がかぶっているのに憧れて買った、

新しい麦藁帽子を、

あの日僕は、かぶっていくつもりだったんだ。

星空を見上げながら、ママは言った。

ローリーは星になったんだと。

星はたくさんあるから、ローリーは寂しくないのだと。

だから今日も僕は、夜になったら空を見上げて、
どの星が君か、探すんだ。

ローリー、僕は相棒として、この町の誰よりもやく、
ローリー、君を見つけてみせるんだ。

11
灯り

夜は、宙に輝く星々を眺めることで一日の終わりを識^しり、
目の前に広がる暗闇に身を委ねることで眠りに就く。

しかし近年の夜はそうではない。

宙の星は大気が汚染されたことで輝きを潜ませ、

地上の闇は眩いばかりのネオンに照らされて失われた。

そして人々は夜がまるで昼間と変わらないかのように過ごす。

世界は光に満たされ過ぎてしまった。

光が溢れかえり、人を惑わすようになった。

光の奔流^{ほんりゅう}に飲み込まれた人はやがて光を失っていく。

光を、光としか認識出来なくなり、物を捉えられなくなり、

世界が光の在る、白、か、光の無い、黒、に染まっていく。

モノクロとも違う、純白と漆黒の両極端の世界。

光が在れば、白。

光が無ければ、黒。

終端を思わせる認識世界の中で人は灯りに何を思うだろう。

光を失わされた恨みだろうか。

光を与えてくれた感謝だろうか。

私はきつと……

「ああ、明日はついにテストか」

今日は早めに授業が終わり、四時には家に帰った。

明日のテストへの対策はバツチリ。ここ数日テレビにもゲーム機にもパソコンにも一切触れず、テスト前だというのに楽しそうに会話している余裕な奴らに目もくれず、睡眠もあまりとらずにずっと勉強していた。もう演習問題なんて目を閉じてでも解ける！楽勝！だからとりあえず今日はゆつくり体を休めて万全の態勢で挑もう！

俺はシャワーを浴びて軽く食べて 五時には床に就いた。

そして…… さすがに早く寝すぎたのかまだ外が暗いうちに目が覚めてしまった。時計を見ると時刻は十一時。なんだ六時間しか寝ていないのか。最近あまり寝てないからうまく寝付けなくなつたようだ。まあいいやもう一回寝よう。

しかし、寝付けない懸念を拭うようにまたすぐに眠気が襲ってきて、俺は再び夢の中へ旅立った。いや、夢も見ないほど熟睡していたか……

そして、次に目が覚めたとき時刻は七時。うーん よく寝た……さて、体調も万全だ！よしテスト頑張るぞ！

「ん？」

そこでなぜか違和感。七時といえば朝日が眩しい時間帯のはずなのに外はなぜか暗い。

あれ？夜の七時か？二時間しか寝てない？いや待て。先ほど確認した時計は十一時だった。寝ぼけて見間違えたとは思えないし、二時間しか寝ていないのにここまで熟睡した気分にはなれ……

そこで、夜のニュースを見て唖然とした。

今日は 七月二十二日――

しかもこの場所はちやうど皆既帯の上――

いろんな意味で取り残された自分――

ゲームやパソコンはともかく、テレビや人の話くらい気にかけておくべきだったのか？

翌年 俺はその授業を再履修して満点を取ってやった。
ざまあw

もうすっかり太陽と月が離れ離れになった青空に 俺の自嘲が虚しく響く。
どうか明日もちゃんとお天道様を拝めますように。

3 / 彼女は夜が好きだと言った。僕は嫌いだった。

きつと、それが僕たちの圧倒的な差異で、彼女はプラスで、僕はマイナスで、それで僕らは惹き合ったんだろう。僕にはそれが間違いにしか思えなかったんだ。

眠る娘に

さよならと

ありがとう

彼女の部屋に入ると、規則的な寝息が聞こえた。この頃ずつとこうなのだ。彼女の手を取る。温かい。そのまましばらくして、部屋を出た。

やはり彼女の寝顔は綺麗だと思う。あの余りに無防備な表情を見ていると、ふいに彼女の細い首を締めたくなる衝動に駆られる時がある。それに比べて僕の表情はきつと、醜いのだろう。僕には睡眠というものがわからないのだ。気付いたときにはそうだった。母親にいい子は早く寝なさいって怒られるのが苦痛でしうがなかった。だから僕は寝る真似を必死で覚えたのだった。

僕と彼女の平穩は急に終わりを迎えた。平穩とか日常なんてものは、きつとそういうものなんだろ。いや、僕は目を逸らしてただけなんだろ。いつかは訪れる、分かりきった事だった。

その日も僕は彼女の病室へと向かった。ドアの先には彼女の両親。僕は何度か見かけたことがあるけど、向こうは僕を知らないはずだ。普段は仕事のある時間、ということとはつまり…。僕がそつとドアを閉めようとする

「娘の最期の顔、見てやってもらえませんか。娘がそう望んでいる気がするんです」

驚くほど穏やかな声だった。僕の脚は自然と進んで、彼女の顔を見た。生前と変らない、美しい寝顔だった。その時、僕は怖い顔をしていたと思う。僕と彼女の差異は最後まで埋まらなかった。それが、なんだか憎かった。たまらなく愛おしく、それでいて憎かった。

何故かその後、彼女の母親に食事に誘われた。何か言いたそうだったから、僕は断れなかった。

「娘は、よく貴方の話をしていましたよ」

「…そうなんですか」初耳だ。

「貴方のことを話してくれたあの日、娘の笑顔を見るのは久しぶりでした。娘は明るい子でしか、あんな病氣になつてしまつては、次第に暗くなつていきました。不思議な病氣ですよ。身体にはどこにも異常が無いんですよ。ただ、睡眠時間がだんだんと伸びていつて最後には死に至るんです。永眠とは上手くいったものですよ。私なんか、娘がそのうち目を覚ますんじゃないかって、今でもそう思うんです。ああ、話が逸れてしまいましたね、御免なさい。娘はあなたに感謝していましたよ」

「…えつと、それは」僕に、感謝？

「私と正反対の子がいるんだつて、嬉しそうに娘は話してくれました。私には不幸な病氣だけど、それを幸せに思う人もいるんだよ、つて。あの子の友達はだんだんと離れていきました。見舞いに来ても、寝ているばかりなのだからしょうがないですよ。それでも、あなたは毎日病室に来てくれたそうですね。これはお医者様から聞いたのですけれど。目を覚ましたとき、貴方の顔が見られると嬉しいつて、娘は言っていました。貴方のおかげで、娘は幸せな夢を見られたと思います。ありがとうございました。私と娘からの、感謝の気持ちです」そう言つて深々と頭を下げたのだった。いつの間にか、僕の心の黒い部分はどこかへ行ってしまった。夜はみんな寝ていて、孤独な気分になるから嫌いだと言つた僕。夜はみんな寝ていて、その時だけは一緒に嬉しいと言つた彼女。二人の出会いはいは正しかったのかも知れない。今なら素直にそう思えるんだ。

再び彼女の病室へと向かう途中、彼女の笑顔や声、仕草、様々な思い出が頭にわき上がつて来た。僕の記憶の中で彼女はいつも笑顔だった。彼女の強さが今になって実感できた。そして同時に、喪失感が僕を襲つてきた。今の僕には、單純に彼女が愛おしかった。だから、彼女に送ろう。僕から、二つの言葉を。

そしてその日、僕は初めて眠りに落ちた。彼女の横で一晩中泣いた後だった。朝日に照らされた彼女の寝顔は、やっぱり綺麗だった。

バン、バン――

深夜のオフィスに重く響く音。

ブラインドの向こうから響く音。

暗い室内にただ一人というシチュエーションから、僕はついつい恐ろしい想像をしてしまう。

もしかしたら窓の向こうには凄まじい形相をした女が居るのかもしれない。そしてここを開けると言わんばかりに窓を叩いているのだ。――ここは、三階なのに。

バン、バンバン、バン――

しかしこれだけの音がしているのだ。様子を見ないわけにもいかない。

幼い頃から怪談が苦手だった。子供じみた空想に怯えるな、そう自分に言い聞かせて、足を震わせながらおそるおそる窓に近づき一気にブラインドを引き上げる。

当たり前だが、そこに女なんて居なかった。

ふう、と安堵のため息を漏らしてパソコンの前に戻る。

「まったく、忙しいときに脅かすなってんだ。」

窓の外の男はしばらく困惑した表情を見せていたが、やがてどこかへ消えてしまった。

こわいへびが

おかあさんが いっていた

よなかにくちぶえ ふくなくて

おばあちゃんも いっていた

こわいへびが 出るぞって

そんなことは なかったよ

かわいいみーちゃん 来てくれた

いっぱいいっしょに あそんだよ

みーちゃんおうちに おいでって

わたしおうちに しょうたいしたの

みーちゃんとっても かわいいよ

いっしょうけんめい いったのに

かわいがってよ おかあさん

みーちゃんとっても かわいいよ

いっしょうけんめい おねがいしても

おばあちゃんね

きいても

くれない

みーちゃんおうちに かえろうと

わたしのりょうて ぬけだした

おうちのしげみ 入っていった

ずっと

でて

こなかった

の。

私はこれから いい子でいます。

口笛なんか 吹きません

おばあちゃんの 言っていたことが

ちよっとだけわかった

気がしたから。

6 星のない夜空

——ねえ、星を見に行きましょうよ。

気まぐれな友人からの提案だった。そんな彼女は今、何も言わずに望遠鏡を覗いている。

僕らは見晴らしのいいとある丘の上にいた。昔彼女と一緒に星を見たこの場所は、あの頃と何も変わらない。

少し強めの風が吹いて、空を見上げた。雲のない夜空は吸い込まれそうほど暗く、月がぼつんと輝いている。

星は、一つもなかった。

【断章・無星観測】

「何も見えないわね。やっぱり星はなくなったのかしら」

「たぶん、そうなんだろうね……」

二〇〇九年八月三十一日、地球から観測される全ての星が消えた。原因はまだわかっていない。

残ったのはこの地球と、金星、水星、太陽、そしてそれらの衛星だけだった。つまり太陽系の内側から第三惑星までを残して、何もかもなくなったのだ。

それから、一ヶ月と少しが過ぎている。

「最初からわかってたでしょ？何も見えるわけないよ」

「……………」

彼女は答えない。ただ悲しげに、真つ暗な空を眺めていた。

仕方ないので僕も空を見上げる。ないとわかっているのに、つい星を探してしまった。

お互い無言のまま、時間だけが過ぎていく。

「嫌だったのよ」

ふと、彼女が呟いた。

「星がなくなったなんて認めない。認めたくない」

何も言えなかった。僕らは星が好きで天文学を学んでいる。その星が見れなくなるなんて、考えてもいなかった。

「しょうがないよ、だって……」

もうなくなってしまうたんだから、と言いかけたところで、彼女が抱きついてきた。シャンプーの匂いが鼻をくすぐる。

驚きながら彼女を見ると、肩が上下に小さく震えていた。

「泣いてるの？」

そう問い掛けると、彼女の動きが止まった。

「泣いてなんかいないもん」

明らかに涙声だったけど、この状況で茶化すほど僕は馬鹿じゃない。こっちからも腕を回す。

「……私ね、自分が憎い」

耳元で彼女が囁く。

「星のない夜空に慣れてしまった自分が憎いわ」慣れてしまった。たかだか一ヶ月と少しで、星がないことが当たり前になってしまった。あんなに星が、星空が好きだったのに。

「また、星が見たいよ……」

彼女が一際強く抱きしめてくる。つられて僕も、腕に力を込めた。

前言撤回。やっぱり僕は馬鹿かもしれない。

星は本当になくなったのか、それとも見えなただけなのか。そしてそれはどんな理由によつてか。理由がわかれば、星をこの空に取り戻せるのか。

星がなくなったあの日からずっと、無理だと決めつけていた。自分にはどうしようもないことなのだと思っていた。

けれど今、彼女を悲しませたくない自分に気づいた。

あの日、僕らの世界から星が消えた。

それでも僕は強く誓う。どんなに時間がかかってもいい。

いつの日か、もう一度星空を君と——

ある日のこと、ミッションは突然降って来た。汝はこの任務から逃れられない。これは命令である！ 失敗は許されない！

ザ・ミッション

ミッション一…自転車を漕げ！

ここから目的地までは距離がある。従って自転車に乗って行くのがファーストミッションである。ただし、自転車のタイヤはパンクしている。さらに夜間運転である。味方連隊を失うな！

ミッション二…走れ！

汝はあるものを準備してくるのを忘れた。そこでだ、次のミッションは800メートル先のコンビニまでダッシュして“ある物”を買ってこい！ ただし、間違つて「祝」なんて書いてある袋を買うとその時点でミッション失敗となる。

ミッション三…お金を用意しろ！

ミッションを達成するためにはお金が必要だ！ そこで手持ちの金を袋に入れて受付の人に渡せ！ ただし、千円、三千円ならまだいいが二千円を渡したら大減点になるのでそのつもりで！

ミッション四…マインドコントロール

今回のミッションの中で最も難易度の高いミッションだ！ 泣かせるような独特の臭い、会場へ入る長蛇の列、黒い服を着た人々。さよう、ミッションはお焼香をつまむことだ。目の前には友人の写真、泣き出す友人の母親。果たして汝は感情を抑えることが出来るか？

ファイナルミッション…帰還

パンクした自転車で帰還せよ。汝はミッション三で用意したお金以上の品物をいただいた。果たして良心の呵責に耐えられるか？ なお、夜道なので安全に注意することと塩を撒くことは忘れるな！

水面に月が映っている。

コボ

不安定に揺れるその姿を下から見上げる。

少しずつ、少しずつ、月が小さくなっていく。

僕は、誰もいない夜の湖で沈んでいた。

静かに沈みながら、僕はただ月を見る。

というより、それ以外はほとんど何も見えなかった。

コボボ

夜の湖はどこまでも暗く、夏とは思えないほど冷たい。

もうちよつと温かい格好をすればよかったかなと

思いながら、自分の体を見た。

白いシャツにありふれたズボン、

そして、体中に巻き付けた鎖。

コボ

鎖は重しとして十分だったらしく、

きちんと僕を水底へと導いていく。

ぼやけていく月と強くなる水圧とがそれを知らせてくれた。

同時に、体にのしかかる水によって

生きていることを実感する。

ガボッ

ふと、口から空気が溢れた。

代わりに冷たい水が肺に入り、一気に苦しさが増す。

気を紛らわそうと水面を見上げたけど、もう月は見えなかった。

まだ湖の底にはたどり着かない。

この意識がなくなるのと水底に着くのとでは、

どちらが先だろうか。

コボ

ゴボ

やがて頭もうまく働かなくなり、

僅かな明るさが残る頭上をただ眺める。

もう少し月が見たかったなと思ひながら、

スイッチを切るように、僕の意識はなくなった。

サイクル

私たちは毎日ある程度定まった行動を繰り返して、日々を過ごしている。それは私たちだけでなく、自然や宇宙も非常に長い年月をかけて、同様にあるサイクルで回っている。サイクルとは簡単に言ってしまうえば一巡してしまうことだ。例えば私たちが毎日を過ごすというのは言ってしまうえば、朝がきて、夜がきて、また朝が来る。このサイクルを繰り返しているのである。また、サイクルの規模は様々であり、習い事などを繰り返す一週間のサイクル、記念日や行事を繰り返す一年のサイクル。人が生まれ、人が死んでいく一生のサイクル。このように世の中はサイクルだらけである。

サイクルには、発電機関のようにサイクルの効率というものがある。つまり、あるサイクルが一巡したときに、どれだけのものを得られたかという指標である。この効率というものを人間のサイクルにあてはめようとする、それは複雑な問題となる。例えば発電効率ならば、発電量だけに注目すればよいが、人間のサイクルでは何を求めているのかを決めなければ効率が定まらないのである。この人間が求めるものといった問題となると簡単には結論が出せない。ここで、サイクルの有効性を判断するもう一つの基準として、継続性がある。同じサイクルを継続していくには、サイクルを動かす力が必要である。例えば自然サイクルは太陽光によって成り立っている。サイクルの継続性は必要な力によって決まるのである。

人が選択し、実行できるサイクルは求めるものによって内容は全く異なるものになる。そのため、他人が続いているサイクルを理解できないこともある。しかし、重要なことはそのサイクルを継続していることであり、人はそのサイクルの継続によって目標・理想・夢に近づいているのである。ただし、何もしないサイクルではいくら継続しても何も得られないし、得るものがあったても過酷なサイクルでは継続ができない。今現在、自分のサイクルが決まっていけないという人もいるだろうが、目標に向けたサイクルを見つけ、必要な対価を用意しそのサイクルを継続してほしい。そのサイクルによって得るものは、決して無駄にならないだろう。

みんな俺の事もっとよく見てくれ！

そりやあいつに比べたら

小さいし

まぶしくないし

存在感薄いさあ……！

何だよ

あいつが俺の後ろに隠れるからって

あんなに人が寄ってたかつて！

いいからお前ら……！

ショーの主役はあいつの前にいる

俺だ……！

月、太陽に嫉妬する。